

# 阿蘇山上ビジターセンターにおける官民連携の事例

株式会社ブレック研究所九州事務所 事務所長 山口朋浩

## 一. 国立公園と阿蘇における官民連携

阿蘇くじゅう国立公園は、国内最大級のカルデラを擁する「活火山」と、長い年月をかけた人の営みにより維持されてきた「草原」という希有な自然景観を有しており、昭和九年（一九三四年）に国内最初の八つの国立公園の一つとして公園指定された。以降、国・県・各自治体等の行政機関、および多様な事業者や諸団体、生業を営む地域の住民らとともに、阿蘇の自然景観の保全や草原再生といったさまざまな仕組みづくりや取り組みが進められてきた。

国立公園の阿蘇地域では、平成二八年（二〇一六年）に熊本地震および豪雨、噴火等の自然災害により甚大な被害に見舞われた。一方

で、二〇二〇年の訪日外国人旅行者数を四、〇〇〇万人とするのが国の政策である「明日の日本を支える観光ビジョン」の一〇施策の一つとして、「国立公園満喫プロジェクト」が立ち上がり、阿蘇くじゅう国立公園が選定されたところである。阿蘇くじゅう国立公園満喫プロジェクトにおいては、阿蘇地域の復興が盛り込まれた方策となっており、さらなる自然環境の保全と利活用、地域の官民連携の推進が取り組み方針として示された。このなかで、阿蘇復興に係る環境省の主要事業の一つとして、阿蘇山上地区に直轄ビジターセンター設置が位置付けられることとなった。

## 一. 阿蘇における二つめの利用拠点施設の役割

阿蘇地域では、自然学習・散策

ができる阿蘇野草園と併設されている博物館展示施設である南阿蘇ビジターセンター（高森町）、草原学習・再生活動の拠点として特化した阿蘇草原保全活動センター（阿蘇市）が既に整備されている。

一方、阿蘇山上地区は、国内有数の火山に係る博物館である阿蘇火山博物館や飲食物販等の民間施設が集積しており、草千里ヶ浜等の利用者の多い特性がみられる。これを活かし、阿蘇地域の三つめの利用拠点施設は「阿蘇の玄関口」と位置付け、利用者へ地域の情報提供を行い、山上地区のみならず各センターや園地・ジオサイト等への利用を促す、阿蘇くじゅう国立公園全体での利用のハブ拠点として機能するものとした。

## 二. ビジターセンター設置を通じた新しい官民の連携の形

阿蘇火山博物館は、昭和五五年（一九八〇年）に草千里博物館展示事業として公園事業認可され、昭和五七年に民間施設としてオープン、平成一六年（二〇〇四年）からは公益財団法人による運営がなされている。阿蘇火山を中心とした常設展示の他、ジオガイドツアー

も開催する等の教育機能を果たしているとともに、ユネスコ世界ジオパークネットワークに登録された「阿蘇ジオパーク」の事務局も併設し、国際的な学術研究や地域のとりまとめに一翼を担っており、多面的な利用拠点施設として成立している。

この阿蘇火山博物館の一階フロア約三〇〇㎡に、環境省阿蘇山上ビジターセンターが併設されることになった。今回のような民間施設への直轄ビジターセンターの設置は全国初の例である。これにより、新設と比較して整備コストの低減化、既存施設との相互利用による利用の活性化など、高い既存公園施設のリニューアル効果が期



フロアの一隅の阿蘇山上ビジターセンター

待できるものとなっている。

運営面では、原則として環境省の常駐職員のない施設であるが、阿蘇火山博物館内のガイドボランティアやジオガイドらとの相互連携をとっており、利用者に対して、一体的な情報提供やレクチャーの場として機能できるように工夫している。また、センター内には地域の紹介コーナーを設け、ガイドツアー情報や見どころ・催事等の阿蘇地域全体の利用情報を発信できるようにしており、パンフレットラックなどによる柔軟な運用がしやすいものとした。

このように、官と民、地域の重層的な連携により、阿蘇山上地区の新たな複合機能拠点施設として生まれ変わることとなった。

#### 四. 国立公園満喫プロジェクトを踏まえた博物展示

国立公園満喫プロジェクトの推進にあたっては、多言語化への対応が標準であり、阿蘇山上ビジターセンターでは、その先行事例として以下のような取り組みを行った。

① 視覚的、直観的な情報提供  
多言語化対応とは、外国人利用

者へのネイティブな情報提供・理解の深化という面が強調されているが、そもそも言語・年齢・文化・知覚など「多様な」利用者に対して、いかにして情報を伝えるか、という博物展示施設が常に直面する普遍的課題が、外国人に特化して改めて顕在化したともいえるものである。

このため、阿蘇山上ビジターセンターでは、阿蘇の玄関口として「見れば分かる展示」を心がけ、文字解説を極力減らし、グラフィックを主体とした視覚的・直観的なものとした。

② デジタル技術と多言語表記  
阿蘇山上ビジターセンターでの



円形造形とシンプルなグラフィック



見てわかるを心がけた展示

対象言語は、その利用実態からは中国・韓国・台湾に欧州の来訪者が多いため、現時点では標準的な五言語対応（日・英・中（繁体字）・中（繁体字）・韓）とした。今後の阿蘇での傾向として、東南アジアからの利用者が増えつつあり、こうした変動には、常に対応が必要になると考えられる。

このため、展示には、内容の更新や追加が比較的容易なデジタルサイネージを多く採用し、タッチパネル式の切り替えで五言語表記とした。



タッチパネル切り替え式

一方で、利用案内等のグラフィックパネルでの解説文は、日本語＋英文の二言語として字数を抑制した。これは、利用者の実態として、欧州各国や近年増加している少人数外国人旅行者は英語の識字率が高く、現状でも英文併記で十分に機能していることを踏まえている。対象言語数は、実情と将来像を懸案し、今後十分な検討が必

要である。

#### 五. まとめ

阿蘇山上ビジターセンターの開設は、施設の供用のみならず運用の点についても、官と民の新しい連携手法の一つの形となるものであり、国立公園満喫プロジェクト施設の先行事例としても、一つの解答例といえる。当然ながら模範解答でもなく、今後とも、さまざまな異なり変化する状況・条件に応じ、常によりベターな解決策を模索していきたいと考えている。

山口 朋浩 ● やまぐち ともひろ  
株式会社ブラック研究所九州事務所 事務所長。  
技術士（環境部門、建設部門）。  
東京農業大学造園学科卒業後、環境設計並びに緑化・自然環境保全に係る調査計画業務に従事。平成二三年度から九州に配属。国立公園をはじめ、動植物園や文化財等も含めた幅広い「環境」をキーワードとした企画開発に取り組み。